

説教 『世の光、命の光』 山本 護牧師
聖書 詩編 27:1~4 / ヨハネによる福音書 8:12~14

「わたしは～である」という特徴的な言葉遣いは、ヨハネ福音書にくり返し現れる。「わたしは命のパンである(ヨハネ 6:35,48)」、「わたしは羊の門である(10:7)」、「わたしは良い羊飼いである(10:14)」、「わたしは復活であり、命である(11:25)」、「わたしは道であり、真理であり、命である(14:6)」、「わたしはまことのぶどうの木～である(15:1)」。本日の該当箇所も同じ口調で「わたしは世の光である(8:12a)」と自己表明し、続けて「わたしに従う者は暗闇の中を歩かず、命の光を持つ(8:12b)」と語る。

イエスは御自分を、パンやぶどうの木、羊の門や道といった象徴で言い表す。それでは「世の光(8:12)」という象徴は何を物語っているのか。少し後には生来の盲人に視力を与える場面がある(9:1~7)。この奇跡を警戒する権威者らの威圧は大きく、両親は詰問に臆してしまう(9:21~22)。ところが物乞い(9:8)としてももの言うことのなかった当人は、脅しに屈せず堂々と証言する(9:30~33)。これは「世の光」を受けた人間の「反射」なのではないか。だが「神の御心を見ているつもり」の者は光を失う(9:41)。光は、光の源であるイエスによってこそ得られるのだが、信仰の権威者は「己が光に見える」という自負が強く、真の光を拒絶する(8:13)。それでは「世の光」は、どこに照らされているのか。

「わたしに従う者は～命の光を持つ(8:12)」。「わたしは世の光である」というイエスの表明を聞いた者は、「従うか、従わぬか」という三叉路に立たされる。従わないファリサイ人は、そんな自己表明には信憑性がないと言う(8:13)。一般常識では「外部」の世間から認められるものが確かなことで、それが世論という力になる。だが「世の光」は一人の盲人の「内部」を照らし、その彼が自己の手応えから「イエスは救い主(9:33)」だと証言した。キリストの光は弱い一人ひとりの内部で見出される。

「主はわたしの光、わたしの救い、わたしは誰を恐れよう(詩編 27:1a)」。あの物乞い盲人もまた、主の光に照らされ、恐れから解放された。まさしく「主はわたしの命の砦、わたしは誰の前におののくことがある(27:1b)」と語られている通りになる。そしてその人は己が生き方を明確にする(27:4)。

キリストなる世の光は、どうやって盲人を照らしたか。イエスは「わたしは、世にいる間、世の光である(ヨハネ 9:5)」と表明し、「地面に唾をし、唾で土をこねてその人の目にお塗りになった(9:6)」。これもまた一つの象徴行為であって決して呪法ではない。すなわち触れることで盲人の囚われや虚無を御自分のものとされ、そのことで解放された盲人の内部に光が差し込んだ。太陽のごとく世をまんべんなく照らすのではない。私の個人的な悩み、個人的な囚われをイエスが負って下さるがゆえ、世の光が私の内部にまで届く。「肉によって裁く(8:15)」世の価値体系ではなく、キリストを信頼して従っていく。つまり、己が身で世の光を反射させる「命の光を持つ(8:12)」歩み方を選ぶこと。

「わたしは世の光である(8:12)」。光は私自身の内部を照らす。個々の事情に光が当てられ、私たちが囚われから解放放つ。世の価値に囚われ、己の課題に囚われ、病や死に囚われている者を解放する。解放された者は、世の光を反射させる「命の光」となる。喧伝せずとも、命の光は暗闇に煌めく。



【おまけのひとこと】

反射体だからといって ピカピカに磨いて装う必要はない 日々過ごしていれば凸凹ができ 傷がつき 反射率も鈍くなるだろう 人間に個性があるとすれば陰影こそ 世の光はそれを際立たせる